

クラウドコンピューティング時代の企業情報システム展開

ベンダーの見方 / 提言

データベースコンバージョンも含めて システムライフを SAPIENS が大変革

サピエンスジャパン株式会社
代表取締役 岡田 学氏



人、もの、金に続いて、情報が企業の重要な資産であると言われてきた。故に、情報（データベース）を取り扱う情報システムの重要性も認識されてきた。その一方で、クラウドコンピューティング論が提唱されるや「持たざる IT システムの時代」だと言う。TCO 削減に貢献すると、その効果が先行し喧伝されている。解り安さと解り難さが入り交じる。セキュリティ上の問題を出すまでもなくクラウド論の中で改めて確認されているのが「企業にとって一番の財産 / 要はデータである」ことだ。そのデータベースの継続維持に関わる費用が膨大なことが足枷で新規開発の妨げになっているケースもあるようだ。まさに本末転倒とはこのことだ。新規開発とデータベース移行を同時に行う妙手はないか。サピエンス・ジャパンの岡田 学氏に聞いた。（編集部）。

課題はデータベース移行

本誌 クラウド論が目まぐるしい昨今です。こんな時こそ留意しておくべきことは何でしょうか。

岡田 今一番ユーザー企業から反響があるトピックスは、データコンバージョンの問題です。世の中の流れが、メインフレームからオープン系システムへ移行するとか、あるいはクラウドコンピューティング時代にあって、雲の向こうの IT リソースを使うべきだとか、実に様々な言い分が飛び交っていますが、ユーザー企業にとって一番の資産はデータであり、データベースだからです。

IT システムリソースが豊富になったことは、実に喜ばしいことであるとともに、悩ましい問題のタネでもあるのです。

メインフレームからオープン系システムへと、プロセスマシンが移行されると、ユーザーの関心はまずは目先のプログラムの修正/書き換えに集中しますが、実は、その背景には何とも悩ましいデータベースの問題があります。プログラムがどう修正され、システム環境がどう変わろうと、データベースがそのまま使えると言うならいいのですが、現実には決してそうなってはいないのです。

そこでデータコンバージョン作業が必要になってきます。

さらに最近の問題では、DBMS ベンダーから使用料の変更の要求があり、いっそ DBMS をリプレースしてしまえという問題へ発展し、中枢の大規模データベースのコンバージョン作業に着手し始めたケースも出てきています。

問題は、このデータベースのコンバージョン(移行)費用が、結構な額になることです。その最大の理由は、何と言ってもデータコンバージョン作業が一過性の処理作業だということ、請け負う業者もやり方次第では膨大な費用がかかってしまうからです。また言い方を換えますと、目安が不安定な分、ユーザー企業には不当な費用を要求されても判らないというリスクがある作業だからです。

現場から出てきた DP ツール

本誌 どうにもならないのでしょうか。

岡田 そこで登場したのが、サピエンス社が開発した「データポータリング(DP)ツール」です。まさにデータコンバージョン作業におけるデータ定義付けを支援するツールです。

これはもともとベルギーに存在する某邦人企業のヨーロッパ支社で、IBM メインフレームから HP の UNIX マシンへのリプレースに際して行われたデータコンバージョン作業向けに開発されたものがベースになっているツールです。

本誌 ちょっと伺いますが、サピエンス社がこのツールを作ったということですが、SAPIENS 以外のツールプロダクトが発表されたということですか。

岡田 違います。

このデータポータリング(DP)ツールそのものを、ひとつのアプリケーションとして SAPIENS を使って開発したということです。

本誌 SAPIENS ベースのアプリケーションとして第三者ユーザーに提供することもできるのですか。

岡田 是非、そういうご要望があれば対応していく所存です。

ちなみに、すでに日本語対応なども終えて、ご希望のあるユーザー企業の皆様へ提供する準備はできています。

本誌 なるほど。

岡田 マシンの入れ替えに伴うデータコンバージョンの例としては、イスラエル政府の事例もあります。

ちなみに IBM メインフレームから Windows マシンへのリプレースメントに伴うデータコンバージョンが、SAPIENS で開発されたデータポータリングツールを使って行われているようです。

本誌 ところで、DP ツールの日本語版ですが、これはサピエンス・ジャパ WebCR2010/1

ンの保有するプロダクトなのですか。

岡田 その通りです。

本誌 それをどのような形で、いつから提供する予定なのですか。

岡田 事業の詳細はまだ固まっていない部分もありますが、前述しましたように、データコンバージョン作業は一過性の作業ですので、DP ツールをユーザー企業に販売提供しても継続的に必要なツールではありません。そこで、

この DP ツールを使って、データ移行作業を請け負うコンバージョンサービスセンターを運営すること、

もうひとつは、DP ツールを貸し出すという方法もある、と考えているところです。

テストにも最適な DP ツール

本誌 DP ツールの特徴はどんな点でしょうか。

岡田 ツール自体が SAPIENS で作られていることから、コンバージョンの際のテスト工程が効率よく、正確に実行できることです。

実は、データの移行作業自体は、DP ツールが自動的にカバーしてくれるのがポイントです。

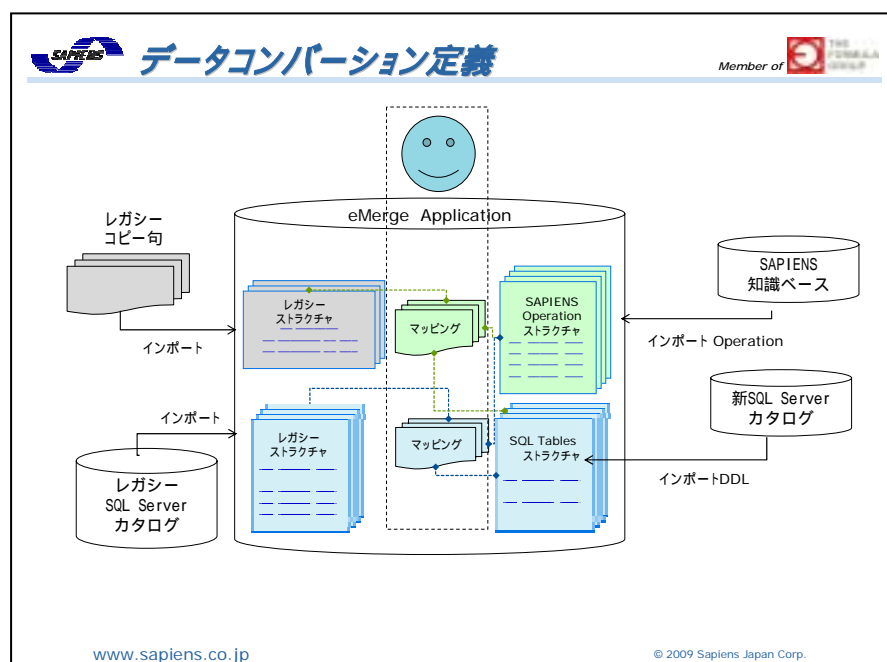
しかし、データコンバージョン作業というのは、一旦終了した後のテスト工程のほうが大変なのです。そのテスト工程を SAPIENS の持つ対話性のある修正機能を使いながら実行できることが大きな特徴になっています。

本誌 なるほど、SAPIENS の保守 / 修正機能が、ここでも発揮されるということですね。

岡田 そういことです。クラウドコンピューティング時代を迎え、ユーザー企業では、実に様々な現存システムの見直しが行われています。

例えば、無手勝に導入されてしまったサーバー群を統合するのもそうですが、

一方では、メインフレームの大規模データベースの再構築を含めた見直しもそうです。DP ツールは、例えば ADABAS から DB2 に移行するためのデータコンバージョンにも使えますし、ORACLE、SQL Server
WebCR2010/1



への移行なども問題なく実行できます。

本誌 ということは、古いデータベースを引きずって、現存システムの再構築に悩んでいるようなユーザー企業にとっては、最適ですね。

岡田 そういうニーズに対応するために開発されたのが DP ツールです。

例えば、ADABAS から DB2 への移行をする場合、ADABAS のデータ構造体を自動的に呼び込み、こういうデータ構造にしたいという新しい構造を指示することでスムーズなコンバージョン作業が実行できます。

本誌 DP ツールそのものは、どんなハードウェアプラットフォームで稼働可能なのでしょうか。

岡田 UNIX マシンでも、Windows マシンでも、システム i でも、最終的にデータベースを稼働させるターゲットマシン上で稼働可能です。ハードウェアフリーという点は SAPIENS の特徴そのものを踏襲しています。

本当のコスト削減を実現

本誌 非常にタイムリーなツールプロダクトの発表ですが、DP ツールを活用して SAPIENS ビジネスをどう展開していこうと考えているのでしょうか。

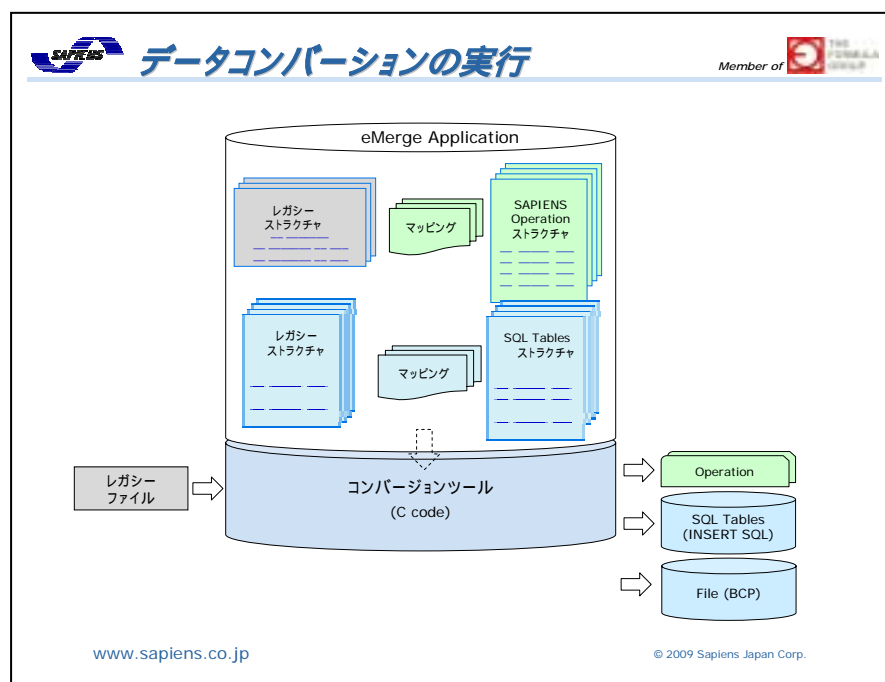
岡田 クラウド時代ということで実に様々なことが言われています。特に強調されているのは、IT リソースを持たないでも CPU パワーを調達することができるとか、大幅な TCO 削減ができるとかいうことです。

ユーザー企業の皆さんはこれまでの IT リソースの導入実績からさまざま学習し、自社に最適な IT システム、ライトサイジング（最適規模）なシステム調達をしたいと考えていると思います。クラウド論は、こうしたユーザー企業の心情を捉えて喧伝されていると思います。

しかし前述したデータベース問題でも解りますように、TCO 削減は基礎的な IT リソースの調達問題ではないのです。

確かに安価なハードウェア、廉価なソフトウェア調達ができ、そしてレガシーなデータベースを最新のデータベース環境に移行できたとしても、肝心のアプリケーション機能が従前のままだったら、本当の TCO

WebCR2010/1



削減とは言えないと思います。

本誌 単なるハードウェアの刷新、データベースコンバージョンに止まっているべきではないと。

岡田 その通りです。

コンバージョンに止まることなく、BPR（ビジネスプロセスリエンジニアリング）を実現しようということでしたら、少なくとも、オンライン処理の部分だけでも、新規に再開発をすることをお進めしたいと思います。

データベースコンバージョン作業を通じて、データ構造全体のあり様を吟味し直すと同時に、自分の企業全体が一体どのようなビジネス刷新／変革をしようとしているのか、改めて認識し直す契機としていくべきだと考えます。

ユーザー企業自身の目標／目的、BPRの方向性がなくては、せっかくのクラウドコンピューティングサービスの活用も、業者が用意した極めて表面的な導入効果しか享受できないと思います。

本誌 ちょっと話が前後しますが、レガシーシステムの抱える問題としてバッチ処理が多用されてきていることがありますが、どのように考えていくべきでしょうか。

目指すはライトサイジング

岡田 レガシーシステムのデータベース移行を躊躇させている背景のひとつに、ご指摘の大規模バッチ処理の存在があります。

つまり、クラウドサービスがあろうがなかろうが、多くのユーザー企業が望んでいるライトサイジング化／最適規模化の妨げになっている大きな要因です。

何故大規模な集中バッチ処理が多用されてきたかという点、ITリソースが高価だったころ、最も経済的（コストミニマム）にCPUを使う手段でもあったのです。そのためのデータベースを構築し、アプリケーション開発をしてきたわけですね。

ITリソース／CPUを安価なものにしたところで、データベースとアプリケーションプログラムをそのままにしておいたら、ほとんどその投資対効果が出ないのは、この理由からです。中には、オンライン処理にした方がいいようなアプリケーションですら、バッチ処理方式になっているものも含まれています。

そこで私どもでは、DPツールというデータベース変換を安価に実行できるツールと、SAPIENSという開発ツールを同時に提供することで、本来的にはオンライン処理をするべきアプリケーションプログラムを安価に、容易に実現していきたいと考えています。

本誌 それがDPツールを製品化した背景ですね。

岡田 お陰様でSAPIENSがアプリケーションの新規開発に最適なツールだということは広く認識されてきています。特に、システムライフサイクル全体から見て、本当のコスト削減を実現しています。

DPツールを準備したことで、データベースの維持管理も含めたシステムライフサイクル全体のコスト削減ソリューションを提供できると考えております。

本誌 ありがとうございます。